



2024 年度 アーツカウンシル・フォーラム

「芸術文化と都市の力：国際展開の新たな機会と挑戦」

Connecting Cultures, Shaping Cities: Challenges, Opportunities, and Strategies

開催主旨

芸術文化の国際的な連携は、東京においても都市の創造性を高め、新たな価値を生み出す重要な要素です。本フォーラムでは、海外の専門家を招き、グローバルなアートシーンにおけるアーティストや芸術文化機関の置かれている状況、国際的なネットワーク構築の重要性、文化政策の役割などについて深く掘り下げます。

芸術文化の国際展開の新しい機会と挑戦、世界的に活躍するアーティストや文化機関を支援するための政策や制度、そして国際的なマーケティングやマネジメントを担う人材育成について、アムステルダム市芸術文化局ディレクターのアラフ・アフマダリ氏、ソウル舞台芸術祭（SPAF）芸術監督チェ・ソッキュ氏、国際的な舞台芸術のプラットフォーム CINARS のエグゼクティブ・ディレクター ジル・ドレ氏をお招きし、塚口麻里子氏をモデレーターに迎え、具体的な事例を交えてディスカッションを展開します。

これらの議論を通じて、芸術文化の国際化が都市にもたらす影響を多角的に分析し、持続可能な芸術文化都市の実現に向けた新たな展望を模索します。

開催概要

開催日時：2025 年 2 月 20 日（木）17:00～20:00

会場：アーツカウンシル東京（東京都千代田区）

言語：日英同時通訳

参加料：無料

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

参加者数：95 名

スピーカー（順不同・敬称略）

アラフ・アフマダリ（アムステルダム市芸術文化局ディレクター）



アムステルダム市芸術文化局の政策アドバイザーを務めた後、2021年2月より同局ディレクター。国際文化政策、資金調達、アントレプレナーシップとクリエイティブ産業における政策立案に幅広い経験を持ち、クリエイティブ（及びデジタル）イノベーションと音楽制作に尽力している。アムステルダム市の最初の「ナイト・ビジョン」を主導し、文化政策の一環としてナイト・カルチャーを捉え、ナイト・カルチャーの発展をアムステルダムのアートの推進力として位置づけた。

チェ・ソッキュ（ソウル舞台芸術祭（SPAF）芸術監督）



Photo: KSJ

フェスティバル・ディレクター、プロデューサー、リサーチャー。ソウル舞台芸術祭（SPAF）芸術監督（2022～26年）。ソウル舞台芸術見本市（PAMS）クリエイティブ・ディレクター（2020～22年）。現在はソウル現代アートの重要なテーマに焦点を当て、フェスティバル・プログラム、クリエイティブなリサーチ・レジデンス、ラボ、ワークショップをはじめとする数多くのプロジェクトを発案・実施。これまでに、英国／韓国シーズンフェスティバル 2017-2018、春川国際マイムフェスティバル、安山国際ストリート劇フェスティバルなどのフェスティバル・ディレクターおよびクリエイティブ・ディレクターを歴任。2005

年に Asia Now Productions（AsiaNow）を創立し、韓国／アジアの革新的なコンテンポラリー・フィジカル・シアターと分野横断的なアートの開発とプロデュース、上演を行っている。2013年からはアジア地域のインディペンデント・プロデューサーのコレクティブ・ネットワーク、Asia Producers Platform（APP）を創設し、近年ではアジア人アーティストのモビリティとアジアの視点の発展を目的として Asia Pacific Festival Connection（APFC）を共同設立した。

ジル・ドレ（CINARS エグゼクティブ・ディレクター）



CINARS 国際開発部門ディレクターを務めた後、2022年3月より CINARS エグゼクティブ・ディレクター。過去 25 年に渡り、アートマネジメントと舞台芸術の国際開発の分野で確かな経験を積む。コンテンポラリー・ダンスの非営利組織 Art Circulation のジェネラル・マネジャー、ダンス・カンパニー O Vertigo のフィナンシャル・ディレクター、Theatre Sans Fil（Caserne Letourneux）のジェネラル・マネジャーを歴任。またケベック州アーツカウンシル（Conseil des Arts et des Lettres du

Québec）、モントリオール大学、ラヴァル市アーツカウンシル、複数の音楽・演劇カンパニーなどのコンサルタントを務めた。

モデレーター

塚口麻里子（舞台芸術制作者オープンネットワーク（ON-PAM）理事長兼事務局長）



2006～17年 PARC – 国際舞台芸術交流センターにて TPAM in Yokohama プログラム・オフィサーとして国際プラットフォーム事業に携わる。舞台芸術制作者オープンネットワーク（ON-PAM）の設立に参加し、2013年より常務理事兼事務局長として従事。2019年4月より現職。2009年文化庁新進芸術家海外研修制度研修員としてエディンバラ、ロンドンに滞在。認定 NPO 法人 ST スポット横浜理事。文化庁文化芸術分野の適正な契約関係構築に向けた検討会議委員。

主催者挨拶

アーツカウンシル・フォーラムは、社会や都市と芸術文化、文化政策に関する今日的な課題をマクロな視点から考える場として 2012 年のアーツカウンシル東京の開設以来開催しており、今回で 14 回目を迎えます。今回は「芸術文化にとっての国際展開の新たな機会と挑戦」をテーマに進めてまいります。

現在、コロナ禍からの回復を迎えつつも、気候変動や自然災害、社会の分断、AI の台頭など、新たな課題が芸術文化活動にも影響を及ぼしています。

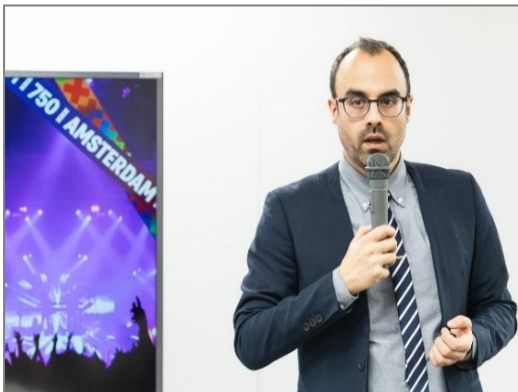
コロナ以前の延長線上ではなく、新たな視点でネットワークや国際連携の在り方、芸術文化の果たすべき役割について、皆さまとともに考える場としたいと思っております。

石綿祐子/アーツカウンシル東京 支援デザイン担当課長

第 1 部 プレゼンテーション

アラフ・アフマダリ（アムステルダム市 芸術文化局ディレクター）

アムステルダム市の国際芸術計画 2025-2028



アムステルダム市は、国際性と芸術文化を都市の DNA と位置づけ、国際協力を文化政策の中核に据えて取り組んでいます。市の文化政策の柱となるのが「芸術計画」であり、すべての人が文化的な生活を享受し、創造的に参加できる社会の実現を目指しています。多様性と包括性を重視し、アクセシビリティを確保することで、文化が誰にとっても身近な存在となるよう努めています。

この「芸術計画」のもと、アムステルダム市は文化施設の整備、ナイト・カルチャーの促進、若年層向けの文化教育、手頃な創作スペースの提供など、多角的な施策を展開しています。創造活動のインキュベーションのため、民間とも連携しながら、文化団体や芸術家への支援を拡充しています。とくに、文化活動が日中だけでなく夜間にも活発に行われるよう、ナイト・カルチャーに着目した政策も推進しています。



アムステルダムの文化経済は非常に活発です。人口約 95 万人のうち、労働人口の 10% がクリエイティブ産業に従事しており、1200 を超える文化団体が活動しています。市の文化予算は年間約 1 億 6900 万ユーロに達し、オランダ全体の文化セクターの 25% がアムステルダムに集積しています。これにより、文化は経済の柱の一つとして位置づけられています。

また、国際的な文化都市として、観光や投資との関連性も高く、年間 2500 万人の観光客のうち約 40% が芸術文化を目的に訪れています。外国からの企業投資も、文化的魅力に基づくものが多く、アムステルダムの文化は国際的な競争力の源泉となっています。

文化の国際展開においては、アムステルダムで制作された芸術作品の 70% 以上が国内外で上演されています。市は、国際文化交流の一環として、「文化貿易ミッション（現在はワークビジット）」を実施し、副市長が他都市を訪れて文化機関やアーティスト同士の連携を促進しています。これは、経済貿易と同

等に、文化の交流を政策として確立させる試みです。こうした取り組みを 2016 年から継続しており、今後はとくにヨーロッパ諸都市との協働に重点を置いていきます。



アムステルダム市は 2025 年に市制 750 周年を迎えます。これを契機に、国際的な文化発信を一層強化し、世界中のオランダ大使館と連携しながらアムステルダムの文化的ナラティブを共有する予定です。広報外交の観点からも、アムステルダムの文化を世界と繋ぐネットワークを築いていきたいと考えています。

このように、アムステルダム市では、文化を単なる政策対象としてではなく、都市の未来を形作る核心的な資源と捉え、持続可能で包摂的な文化都市の実現に向けて取り組んでいます。

ジル・ドレ（CINARS エグゼクティブ・ディレクター）

国際的な視点

私はモントリオールを拠点とする CINARS のエグゼクティブ・ディレクターを務めております。CINARS は、ケベックおよびカナダの舞台芸術を国際的に発信することを使命として、40 年前に設立されました。英語圏に囲まれたフランス語圏ケベック州の文化的アイデンティティを守りながら、世界とつながるためのネットワークづくりを推進してきました。



CINARS の活動は主に二つに分かれています。一つ目はビエンナーレの開催です。私たちは隔年でモントリオールに世界中の舞台芸術関係者を招き、100 以上のショーケースを通じて作品紹介や人的交流を行っています。サーカス、現代演劇、音楽など多様な分野に対応し、会議やワークショップも併設するこのイベントは、今や世界中に 25,000 以上

のネットワークを持つ国際的なプラットフォームへと発展しました。

二つ目は国際ミッションへの参加です。CINARS は年間 12 ほどの国際プロジェクトを通じて、カナダのアーティストやプロデューサーを世界へと導いています。これまで横浜の YPAM などにも参加しており、グローバルな視点からの連携を強化しています。

近年はテクノロジーの活用にも力を入れており、CINARS ネットワークというウェブプラットフォームを開設しました。そこでは各国のツアー情報を共有できる仕組みを構築し、参加者間のつながりをアプリなどでも支援しています。

若い世代への支援も重要なテーマです。私たちは新世代のためのワークショ

ップやセミナーを開催し、短期的な成果よりも、長期的な視野に立った国際ネットワーキングの重要性を伝えています。信頼関係を築くには何度も顔を合わせる必要があります、その積み重ねが本当の意味での連携へとつながります。また、プロデューサーがアーティストを支援する際は、まず彼らの芸術的アイデンティティを尊重する姿勢が必要です。

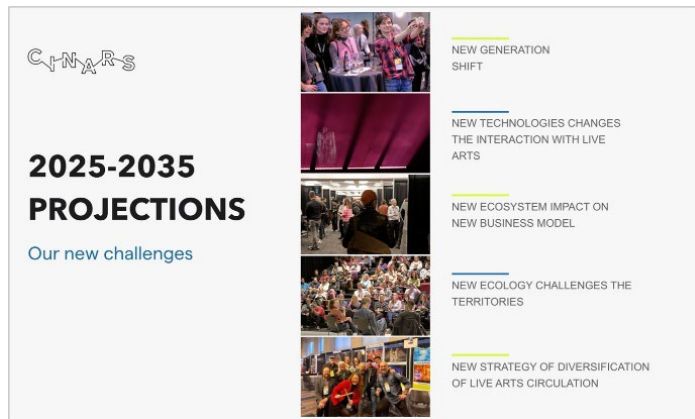
新しいテクノロジーは舞台芸術の在り方も大きく変えつつあります。モダニズム的な構成から、短尺・即時性を重視した表現への移行が見られ、プログラム編成や観客との関係性にも変化が生じています。また、ライブ・アーツのビジネスモデルも変化しており、単に作品を販売するのではなく、ワークショップやレジデンシーなど多様な活動を組み合わせることで、より豊かな芸術体験を創出しています。

コロナ禍を経て、舞台芸術の国際的な流通は新たな局面を迎えています。各国でプログラムが内向きになりつつあるなかで、国際ツアーを支援するプラットフォームやネットワークの整備が急務となっています。フランスの ONDA(French National Office for Contemporary Performing Arts)による The Cooprogram platform や欧州の若手振付家を発掘・支援するコンテンポラリー・ダンス専門のネットワーク組織 Aerowaves、海外アーティストのカナダ公演を支援・代表するケベック州の CAPAS などの取り組みを通じて、世界各地のフェスティバルとの連携も進められています。

私たちは気候変動や価値観の変化が進む現在において、文化政策や国際協力の在り方を見直す必要があると考えています。その中で最も大切なのは、人間的な価値、すなわち人々が共感を通じて自己を理解したり、社会や他者とのつながりを深めたりといった価値を、舞台芸術の核として再確認することです。経済的な困難があっても、そこにヒューマニズム的意義があれば芸術活動は継続可能です。

国としての存在を改めて見つめなおし、なぜどこで国際的にツアーを行うのかという、深い価値観を再確認する必要があります。領土の認識への変化に伴い、ツアーのあり方に責任を持つ必要がありますが、何よりもまず、アーティストが表現するヒューマニズム的な価値を改めて信じ、その価値を世界中に広めるために移動するアーティストへの支持を表明し続けることが重要です。

CINARS は今後も、世界中のアーティストが活躍できる環境を整えるとともに、舞台芸術の国際市場のネ



ットワーク構築に取り組んでまいります。アジア、アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリアとの連携を通じ、連帯と創造を育むプラットフォームであり続けたいと考えています。

チェ・ソッキュ（ソウル舞台芸術祭（SPAF）芸術監督）

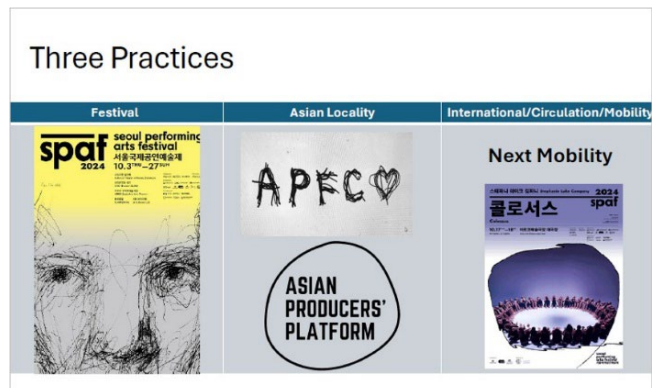
再考と再構築～現代舞台芸術フェスティバルの役割と価値、国際的なモビリティと循環、アジア太平洋地域における視点と連携



現在の複雑で不安定な国際情勢の中で、芸術の役割がどのように変化し、その意義がいかに深まっているかを問い直すことが、私の発表の出発点です。韓国国内における政治的な緊張や、世界的な分断の進行、新自由主義の再台頭、そしてパンデミックや気候危機などが、私たちの生きる現代を大きく揺るがしています。こうした背景の

中で、芸術はどのように社会と向き合い、対話を生み出していけるのかが問われているのです。

私はこれまで 32 年間、フェスティバル・ディレクター、研究者、プロデューサーとして活動してきました。とくに「フェスティバルの視点」「国際的な流動性（ネクスト・モビリティ）」「アジアの地域性」の 3 つの実践を軸に、現代舞台芸術の意義を再考してきました。



フェスティバルでは、芸術を社会の鏡として捉え、多様な声を社会に届けることに注力しています。ジェンダーや障害、多文化性といったテーマを取り上げるとともに、視覚・聴覚障害者との共同制作や、アラブ・イスラム文化を題材にした作品なども紹介してきました。芸術はただ美的価値を追求するだけではなく、社会に存在する課題や異なる視点を共有する場であるべきだと考えています。

また、私は「国際的な移動＝モビリティ」を再定義する必要性を提案しています。パンデミック以降、物理的な移動が制限される中で、グリーンモビリティやスローモビリティ、デジタルインパクトを活かした新たな芸術交流の形を模索しています。具体的には、韓国とオーストラリアのアーティストが共同制作を行い、オンラインで振付やワークショップを実施した上で、現地で公演とアーカイブを行うという多層的なプロジェクトを展開しています。

テクノロジーの進化は、観客との関係性や作品の届け方にも変化をもたらしています。私たちは単にアーティストに責任を求めるのではなく、フェスティバル主催者や資金提供者など、関わるすべての立場がその責任を共有しながら、持続可能な芸術の未来を構築していくべきだと考えています。



さらに私は、アジアの視点をヨーロッパの文脈に持ち込み、新しい対話を生み出すことを目指してきました。アジア太平洋地域のプロデューサーたちと共に、地政学や歴史、地域のアイデンティティを見つめ直しながら、非政府的でトランスナショナル（越境的）なネットワークの構築を進めています。ローカルなコンテキストを無視したグローバルな

芸術には限界があると感じており、地域の文化的背景と結びついた表現が、より深い共感と理解を生むと信じています。

最後に私は、芸術の国際的な実践には、単なる人的移動や国際交流にとどまらない、本質的な価値と責任が伴うと考えています。より多くの人々が、より多様な視点で関わり合い、ローカルとグローバルの橋渡しをする。そのプロセスこそが、芸術文化の力を最大限に引き出す鍵になると信じています。

第2部 ディスカッション



国際性の再定義

塚口麻里子（モデレーター）：第2部のディスカッションのモデレーターを務めさせていただきます、塚口麻里子と申します。私は舞台芸術制作者オープンネットワーク（ON-PAM）の理事長兼事務局長をしています。以前はTPAMの事務局に10年ほど勤めておりまして、その中でチェさんの活動にも関わらせていただきました。今日は「国際性」について、皆さんの再定義を踏まえたお話をお聞きたいと思います。ポピュリズムの台頭、保守化、気候変動といったさまざまなグローバルな課題の中で、芸術はどのように「国際性」に答えていくのか、お三方のご意見を伺います。

アラフ・アフマダリ：私のプレゼンテーションの主なポイントは、アムステルダムにおいて国際文化政策が都市の文化政策と等しいということです。つまり、ローカルと国際の間に線引きはありません。国際的な協力は私たちの都市のDNAに根差しており、これは東京をはじめとする他の多くの大都市にも共通する感覚だと思います。もうひとつ、文化とは、グローバルに生じている課題や物語に対抗するための手段でもあります。だからこそ、都市同士が対話と協力を行うためのプラットフォームを築くことが極めて重要なのです。

ジル・ドレ：国際性についての議論はとても大切だと思います。かつて私たちはグローバル化の時代に生きていましたが、パンデミックをきっかけに状況は急速に変わりつつあります。国境が閉ざされ、移動が制限され、アーティストでさえ自由に行き来できない時期がありました。それ以来、多くの人が「もはや従来のように移動しなくてもいいのでは」と考えるようになっていきます。とはいえ、芸術家が国際的なモビリティを自ら制限することは、ヒューマンズムの価値を共有する機会を減らしてしまうと私は考えています。例えば、ヨーロッパでは飛行機ではなく電車移動が一般化しています。ブリュッセルからパリまでは電車で1時間半です。でも、ケベックでは、ヨーロッパやバンクーバーに行くにも飛行機で6時間かかります。このように「国際性」は居住地域によってその意味が異なるのです。今、私たちはアーティストの移動が減少している現実と向き合いながら、舞台芸術を通じて誰と価値を共有したいのか、どの国と対話したいのかを、もう一度問い直す必要があります。

チェ・ソツキユ：私にとって「国際的である」とは、最近ではあまり意味を持ちません。より重要なのは、「なぜ



国際なのか」「誰の視点なのか」という問いです。国際性は、資金提供者、文化政策立案者、アーティストそれぞれの立場によって異なる意味を持ちます。私は国際的なプロデューサーとして、多様な文化、創造性が出会うことに意義を感じていましたが、今はトランスナショナル（越境的）なアプローチの方に興味があります。なぜなら、「国際」と言ったとき、そこには西洋文化が優位にあるようなヒエラルキーを感じ

ることがあるからです。韓国のK-POPやKドラマといった文化的アイデンティティをアピールする動きもありますが、私のフェスティバルでは国境を超えて、異なるコンテキストでつながることを重視しています。女性の問題一つ取っても、韓国と日本、アムステルダムでは状況が異なります。だからこそ、対話を通じてお互いの違いを学び、理解することが大切だと考えています。

塚口麻里子：本当にそうですね。国際的・越境的に人とつながるというのは、内向きになっていく社会において、外へ開かれるための手段だと感じます。

アラフ・アフマダリ： 普遍的なテーマについて、国境を越えた視点で語ることに新しさを感じます。たとえば、チェさんがフェスティバルで扱っているテーマは、私たちのオランダフェスティバルでも取り上げています。こうしたテーマを共有している都市同士の間には、共通のナラティブがあるのだと実感します。国家同士は政治的、経済的な対立が生じる可能性がありますが、都市と都市の関係性は、それを乗り越える可能性を持っています。だからこそ都市間での対話と協力がますます大切になってきているのだと思います。

チェ・ソッキュ： 最近読んだ、障害のあるアーティストによる芸術の美学についての本にとっても感銘を受けました。障害のある方々の視点は、私たちが想像するものとは全く異なります。だからこそ、異なる角度を受け入れる姿勢が必要なのです。韓国の文化も素晴らしいですが、それは「韓国からの角度」であり、他の視点もまた同じくらい価値のあるものです。国際交流は、そういった異なる角度、見方を学ぶ絶好の機会です。私がこの 32 年間、国際的な活動に喜びを持ち続けてこられたのは、常に新しい視点を得ることができたからなのです。

ネットワークの構築とその意味

塚口麻里子： みなさんのお話の中に、それぞれネットワークについての視点がありました。国際的に共通の 이슈を議論するための場や、対話を通じて理解し合う場として、ネットワークはどう構築されてきたのか、またどのように構築していくべきかについて、ぜひ伺いたいです。とくに欧州とアジアでは、視点やまなざしに違いもあります。ヒエラルキーを生まない関係性、脱中心主義的で包括的なネットワークをどのように実践されているか、チェさんにはアジアのネットワークに関しても補足をお願いできればと思います。

ジル・ドレ： ネットワーキングとは、違いとの対話です。国境を越えて違いについて語り合いながら、共通の



価値を見つけていくことです。面白いのは、長い目で見ると、ネットワークは「友情」になっていくということです。最初は成果を期待して参加しますが、最終的には、そこでした議論や仲間とのつながりこそが大事だと気づきます。15 年、20 年と続く友情が、ツアーを生んだり、企画を生んだりすることもあります。経済性よりも、他者に届きたいという意志、動機、そしてその価値が重要です。

ネットワークとは、閉鎖的になりがちなこの世界で、それでも人とつながり続ける場です。違いを語り合い、共通の価値を育み、それを共有していくことがネットワークの本質だと思います。

アラフ・アフマダリ：私にとって、ネットワークの最も大切な価値は「人間的なつながり」です。国際的なネットワークは、内向き傾向に対する応答のようなものであり、開かれていることそのものが価値なのです。都市同士のネットワーク、舞台芸術の専門ネットワーク、どちらであっても、人と出会い、新しいものを見て、話し合い、発見し合う場になります。私自身、WCCF (World Cities Culture Forum) に 12 年間関わってきましたが、アーツカウンシル東京の皆さんと築いてきた信頼関係が、今こうして東京に来て対話していることにつながっています。

チェ・ソッキュ：私の仕事のほとんどはネットワークを通じて行っています。ネットワークは、経済的理由だけでなく、芸術的にも非常に意味があると思います。私が関わっているのは、アジアのプロデューサー同士をつなぐプラットフォームや、アジア太平洋地域のフェスティバル同士を結ぶ新しいネットワークです。アジア各国では政府主導が多く、文化の独立性をどう保つかが課題です。だからこそ、非政府的で、トランスナショナルなアプローチが必要です。ネットワークの一番の価値は「新しい視点を共有すること」だと思っています。最初は小さく非公式な形で始めましたが、信頼する仲間と一緒に時間をかけて育ててきました。どうしてネットワークを築くのか、どんな視点を持ち込みたいのかをはっきりさせることが重要です。そして、それは人々との信頼で成り立っているのです。

塚口麻里子：私もネットワークは「人」だとずっと教わってきました。長い時間をかけて育まれる友情や助け合いが、やがて思いがけないかたちで結実することがあります。物理的に離れている人だけでなく、時間軸の違う人ともつながっていくような、複雑で立体的な構造がネットワークだと感じています。そして、芸術もまた、ネットワークと同じく、人によってつくられ、広がっていくものだと思います。

ジル・ドレ：若い世代に向けて伝えたいのは、国際的な関係を築くには「同じ人に 3 回会うこと」が必要だ



ということです。初対面のカクテル・パーティーで数分話し、1 年後に再会して 10 分話し、3 回目によく一緒にコーヒーを飲むようになる。そのくらい、信頼関係の構築には時間がかかります。プログラマーは毎週 200 以上の提案を受け取っており、顔を知らない相手のメールは開かないかもしれません。だからこそ、物理的に出会い、価値を共有し、時間をかけて関係を築くことがとても大事なのです。

アラブ・アフマダリ：政策の面から見ると、カクテル・パーティーは「投資」として理解されにくいことがあります。でも、そこにはリーダーシップと人的交流の価値への理解が必要です。文化に投資する際は、金銭的リターンだけではなく、社会的・外交的なリターンにも目を向けるべきです。アムステルダムでは、より人間的な価値を重視するリーダーシップが育ちつつあります。必ずしも経済的に最も効率的ではないとしても、それが他国との関係性や社会的価値を育むのであれば、十分に意味のある投資だと思っています。

チェ・ソッキュ：アジアのネットワークを構築していく中で、地域ごとの資金調達の考え方の違いを強く感じています。日本、韓国、香港、マレーシア、それぞれに異なる制度や文化があります。その中で、リソースを「平等」に分けることよりも、責任をどう共有し、有効に分配していくかが重要です。また、政府の資金には条件がつくことが多いので、私たちは非政府的で柔軟なネットワークを構築してきました。近年は「リーダーが導く」というよりも、「チーム全体で目標を共有し、進めていく」コレクティブな形が増えています。若い世代も主体性を持って参加し、責任を持ちながら取り組むようになっていきます。そうした姿勢こそが、これからのネットワークを育てていくのだと思います。

次世代育成とコンテクストの共有

塚口麻里子：主体性を持って活動し、その責任を共有することも大切な視点だと思います。日本や東京という枠組みの中で構築された組織や構造を越えて、国際的なネットワークに飛び込んでいくには、自分自身の人格や価値を持って関わっていくことが求められます。国際的な人材育成を考える上で、異なる文化的背景を持つ人たちとどう対話し、どんな知識やマインドセットが必要なのか、またそれを育てる仕組みやプログラムについて伺いたいと思います。

ジル・ドレ：CINARS の活動を 40 年続けてきて、新しい世代をこのネットワークに迎えることがますます重要になっています。私たちは新進アーティストに注目すると同時に、新しい世代とシニア世代をつなぐワークショップを世界各地で行っています。たとえばアヴィニオンやエディンバラで会議を行う際にも、若い世代向けのワークショップを開催し、3 年間をかけて戦略の構築や、アーティスティックなアイデンティティの育成、地域社会との関係づくりなどを支援しています。とくに New Writing という新しい表現分野に注目していて、それが次の世代にとって非常に重要な舞台となっていると感じています。

チェ・ソッキュ：フェスティバルとアジアのネットワークでの育成には少し違いがありますが、共通して大切なのは「対話を通じて異なるコンテクストを学ぶこと」だと思います。昨年は中東やイスラムに焦点を当てて作品を紹介しました。チケットが売れるか心配もありましたが、観客が作品を観て、家に帰る途中で友人と感想を語り合ってくれば、それが一番良い形だと思っています。さらに、作品の背景を深めるために、アラブに関する講義やフォーラムを開きました。創作プロセスを共有し、9 名のアーティストが自身の変化を語る場も設けました。学生時代、アフタートークはあまり魅力的ではありませんでしたが、今は観客が積極的に関わっています。質問をモバイル経由で受け付けたりして、劇場での対話が活発になっています。私

は、芸術は答えを教えるのではなく、問いを投げかけ、観客が自分自身の考えを育てていくものであると考えています。作品だけでなく、ワークショップやフォーラムを通じて知識と創造の共有を図っています。

アジアのネットワークでも、地元の文脈を理解することは非常に重要です。アーティストは創作のために多くのリサーチをしますが、プロデューサーがそれをするための支援はほとんどありません。本来は、プロデューサー自身もローカルコンテキストを学ぶべきだと思います。今年はマレーシアや沖縄を訪問し、アジア各地のプロデューサーとともに対話を重ねています。どれだけリサーチの時間を確保し、彼らの視点を聞き、異なるコンテキストを学べるかが重要だと思います。

アラフ・アフマダリ：若い世代は、SNS を通じて世界中とつながっています。それは彼らにとって、他の文化や地域を学ぶ入口でもあります。私自身、日本のアニメがきっかけでこの国に関心を持ちました。今、私がアムステルダム市の文化政策に関わるようになって、若い世代の力が政策を変えていくのを目の当たりにしています。私のチームの平均年齢は就任後 10 歳以上下がりました。ナイト・カルチャー政策などは、若い世代が主体的に形作ったものです。彼らが所有感を持って創っていくことが大切だと思います。

私が 37 歳でディレクターに就任したとき、同じようにリードする準備ができている若い世代が周囲にたくさんいました。私たちには、そういった人たちに「席を与える」責任があると思っています。明確な戦略を持って、世代交代やチームづくりを行ってきました。

塚口麻里子：年齢層を意図的に下げていったというのは、とても興味深いです。若い世代が自ら手を挙げてリーダーシップを取り始めているというのも、心強いですね。

チェ・ソッキュ：ジェンダーの観点で言えば、私の部署で私は唯一の男性です。例えば、アクセシビリティに関するプロジェクトでは、初めの 2 年間は障害のない人々が運営していましたが、昨年から障害当事者の専門家が早い段階から関わるようになり、大きな変化がありました。韓国はまだ非常に均質な社会ですので、こうした多様性への取り組みは本当に重要だと思っています。

ジル・ドレ：カナダ・ケベックでも、評議会には多様性を確保するための指針やステートメントがあります。私のチームでも、私は唯一の男性です。移民国家であるカナダでは、多様性が民主主義の一部として尊重されています。右傾化の動きが世界的に見られる今こそ、舞台芸術におけるヒューマンイズムの価値を循環させることが大切です。私たちは次の世代をチームに迎え入れ、国際的なプログラムを積極的に組んでいます。多様性は、文化政策における民主主義そのもののものです。

チェ・ソッキュ：多様性と効率性は重要なテーマです。障害のあるアーティストの制作現場では、通訳などの補助が必要なため、時間がかかります。けれども、そういった環境で生まれる創造の深さや学びは、単なる効率では測れない価値を持っています。多様な人が同じ空間にいることそのものが、私たちの認識を揺さぶり、学びのきっかけになるとと思っています。

具体的な支援制度

塚口麻里子：芸術家が国際的に活動する際に、都市や国がどういった支援制度を持っているのか、具体例があれば教えていただけますか。

アラフ・アフマダリ：例えば、外務省や世界中のオランダ大使館の活動を通じて、国際協力をさまざまな方法で促進できます。国の責任は、資金提供やネットワーキング、対話の促進など、政府として扉を開くことにあります。私や副市長が東京を訪れたのも、すでに築かれた関係をさらに強化するためです。政府は国際協力に対して、非常に積極的な役割を果たせると考えています。都市の視点からも、芸術家が国際的に協力するためのスペースを提供することが重要です。国際都市として、国際的なコラボレーションのための物理的な場所が必須であり、都市や地方自治体も同じように責任を持つべきです。国と都市、両者の連携があつてこそ、国際的な活動がより強く推進できると思います。

チェ・ソッキュ：経済的な支援はやはり大切です。芸術文化のモビリティにおいて、経済的な側面は大きいですが、それだけが理由ではないと思います。私は20歳のときと、50代半ばの今では、国際的に働く意義が変わってきました。だからこそ「なぜ国際である必要があるのか？」という問いを常に立てています。国際的にツアーをしたいのか、それとも国際的なコンテクストを学びたいのか、目指す方向によって必要な支援も異なります。アーティストがこの問いを自らに課すこと自体に意味があります。

政策立案者や資金提供者の役割ももちろん重要です。特に私はKPI（重要業績評価指標）について議論したいと思います。新進アーティストたちは国際的な活動にとっても関心を持っていますが、中堅や確立されたアーティストと比べて経済的成果を出すのが難しいです。ただしKPIを設定する際、彼らが地元や地域社会に持ち帰ってくる多様な価値や質をどう評価するのかという視点が必要です。

塚口麻里子：フェスティバルなどで成果を示すとき、来場者数のような定量的な指標はわかりやすいですが、次世代育成のように時間がかかる定性的な成果はどのように評価すべきでしょうか。

チェ・ソッキュ：韓国のアーツカウンシルには、フェスティバルの成果測定に協力的で感謝しています。最初は来場者数やメディア露出数といった定量的な評価が主でしたが、最近では3つの測定軸が明確化されました。一つ目は定量的な数値指標。二つ目は芸術的な質に関する評価で、革新性や新たな芸術的言説を生んでいるか、観客との関係性、セクターとの連携などが含まれます。そして三つ目が社会的価値の評価です。たとえば、障害者へのアクセシビリティ、多言語対応、環境配慮など、より包括的な評価項目です。以前は数値だけだったので、現在のように制度が改善されたことをとても嬉しく思っています。

アラフ・アフマダリ：オランダではそれを「社会的インパクト」と呼んでいます。この成果指標に関する考え方は世界的に急速に変化しています。キュさんが話されたように、韓国でも大きな動きがあると知って、これは国家単位を越えて地球規模の課題なのだと感じました。社会的インパクトについて国際的にもっと対話を

深めていくべきだと思います。

ジル・ドレ：最終的には、芸術的ステートメントと、それを誰に届けたいのかが重要だと思います。伝えたいメッセージが明確で、その内容が観客に届いたとき、それは高品質なイベントとなり、結果として定量的にも評価されます。私は昨年 11 月に CINARS ビエンナーレの報告書をまとめましたが、来場者数が非常に高かったです。焦点を当てた内容の質が来場者を惹きつけたのだと思います。数字の成果は、目指す対話の質が高ければ自然とついてくるものだと思っています。つまり、質と量は対立するものではなく、両立するのだと思います。

地方と都市における文化の格差と役割

塚口麻里子：アフマダリさんのご発言の中で、アムステルダム文化の役割について大変興味深く感じました。東京と似ている印象も受けました。日本では、東京に文化や予算、輸入芸術が集中しており、地方との文化格差が年々広がっています。オランダではこのような一極集中に対して、どのような状況があり、どのように対処しているのかをお伺いしたいです。

アラフ・アフマダリ：都市やローカルの視点に重点を置きつつも、グローバルな課題とつながる良い例だと思



います。私のプレゼンでもお話ししましたが、アムステルダムで制作される作品の 70% 以上が市外で上演されています。私たちは、「大都市 対 地方」というような対立的な構図ではなく、都市の機能が全国の文化プログラムや文化インフラに波及するような生態系を意識しています。

全国的な機能を持つプログラムにも積極的に投資していますし、それは国の役割に

近いところもあると思います。私たちは、自分たちの役割を明確に認識しています。東京も非常に広く、多様性に富んだ大都市ですので、東京の視点からもこうした構造を見てみることは意義があると思います。他の都市との関係性に投資し、相互理解を生む対話を進めたいと考えています。他のオランダの都市にとっても、私たちの都市が持つ機能を共有することは非常に重要であると思っています。その第一歩として、自ら積極的に対話を始めることに取り組んでいます。

ジル・ドレ：一つ補足させていただきたいのは、コロナ禍以降の都市部での生活費の高騰についてです。私が育ったモンリオールでは、以前は生活費があまり高くなく、芸術家はその街に滞在して制作活動を行うのはそれほど難しくありませんでした。パンデミックの影響で多くの芸術家が生活費の安い地方都市に拠点を移しています。現在では、新しいテクノロジーによって、地方にいながらでも国際的なネットワークに直

接つながることができるようになりました。その結果、都市に住んでいなくても地方から国際的なショーの企画を行う事例が増えてきています。世界中の都市とつながり、ローカルという概念や領土意識そのものが変化しているように感じています。この変化はとても興味深いです。

チェ・ソッキュ：地方分権は重要だと思います。韓国でも同様です。現代アートのアーティストの80%がソウル周辺に住んでいます。政府や地方自治体による資金的な支援の成果もあって、過去15年間で地方分権化は進みました。同時に、私が取り組んでいるプロジェクトでは、地域間に依然として大きなギャップがあります。私自身も含めて、どうしてもソウルに集中しがちになります。

たとえば、私が一緒に働いたアーティストは、国境沿いの地域で10年間現代アートの活動を行い、地域社会に大きく貢献しましたが、契約が終了した時点でその場所を離れなければなりません。地方での文化開発は重要ですが、その成果をどのように継続させるのかが課題です。芸術家が地域に根づいて作品を生み出し、それを共有することが重要であり、流通だけでなく、創造の場におけるアーティストの移住や生活を支援する政策が求められていると思います。

都市の力と国際的なネットワーク

塚口麻里子：国際的なネットワークを考えるうえで、今日のテーマにもある「都市の力」はとても重要だと思います。アフマダリさんが紹介されていたWCCFも、まさにその理念に基づいているはずです。都市間の関係構築について、ぜひ皆様のご意見をお聞かせください。

アラフ・アフマダリ：副市長が閉会の挨拶でネットワークの価値について詳しくお話しされる予定です。さまざまな都市のアイデアからインスピレーションを得ることは非常に重要です。加えて、各首都が直面している課題というのは、それぞれ独自で、他の都市とは規模も構造も異なります。そのため、政策を考えることが時に孤独な作業にもなります。だからこそ、都市同士が国際的な関係を築き、対話を行うことには大きな意義があります。そのため、WCCFは非常に重要な位置を占めています。都市同士は確実に協力できると信じています。そして同時に、都市は国家の一部としての責任も果たすべきであり、都市の持つ力はとても大きく、私はその力を信じています。

チェ・ソッキュ：都市と都市のつながりは非常に重要です。私が関わったプロジェクトに「Connected City」というものがあります。これは、イギリスの都市と韓国の都市を結びつけるもので、2年間にわたり都市がエクイティ研究所と協力して実施しました。そのほかにも、アジアの6つの異なる都市をつなぐプロジェクトにも関わりました。繰り返しになりますが、重要なのはローカルのコンテキストを理解することです。そのためには、各都市の歴史を学び、異なる背景を持つ都市同士が結びつくことで、お互いに学び合うことが可能になります。私にとって都市間のつながりは、国境を越えた「トランスナショナル」な視点を持つうえで、非常に大切なものです。

ジル・ドレ：2022 年に開催した CINARS では、参加者から「モントリオールは都市としての個性と魅力があり、文化的な体験に投資する価値がある」という声を多くいただきました。私たちは現在、ナッシュビルやエディンバラといった魅力ある都市にある同業者団体と、アーティストの国際的な循環に関するステートメントづくりを議論しています。都市は国家ではありませんが、それぞれが独自の魅力と個性を持ち、国家全体に対しても大きな影響力を持つ存在だと考えています。

芸術文化の価値と力

塚口麻里子：最後に、このセッションのまとめとして、芸術文化の力や芸術文化の持つ本質的な価値についての皆さんに一言ずつコメントいただきたいと思います。

アラフ・アフマダリ：創造力、イマジネーション。

ジル・ドレ：オープンネス。民主主義。

チェ・ソッキュ：芸術的想像力で問いかけ、提案すること。



撮影：中山裕貴

クローヅングリマーク アムステルダム市副市長 トゥーリア・メリアーニ

現職では副市長として、芸術文化政策、イベント事業、インクルージョン及び反差別政策などに取り組む。それ以前は長年にわたり文化事業に従事し、トルハイストウイン芸術・音楽センターのディレクターを務めた。その他にも、文化セクターでさまざまな補助的役職を担うと共に、財団 Ieder1 ではオランダの多様性促進に尽力した。



私たちが芸術や文化について語るとき、何より大切なのは「ナラティブ」、すなわち物語です。人の記憶に深く残るのは理論ではなく、心に触れた体験や物語だからです。その意味で、芸術と文化は社会における不可欠な存在であると強く信じています。

このフォーラムでは、登壇者の皆さんから多くの学びがありました。アラフ・アフマダリからは都市の文化芸術の価値を数字で理解する重要性を、ジル・ドレさんのお話からは、芸術における長期的な視点と信頼関係の大切さを改めて感じました。また、チェ・ソッキュさんからは、ジェンダーバランスの重要性をご指摘頂きありがとうございます。次のフォーラムでは、パネルに3人の女性登壇者が並ぶことを期待しています。

私が初めて東京を訪れたのは2019年の12月でした。東京に来て世界地図の見え方が変わり、視点を変えることの大切さを実感しました。私自身、モロッコに生まれ、6歳のときに母とともにオランダへ移住しました。言語も文化も全く異なる環境に適応する中で、私は移民としての経験を通じて多くを学びました。アムステルダムという都市が多様性を受け入れる体制を持っていたからこそ、私は自分の居場所を見出せたのだと思います。180もの文化が共存するこの都市には、異なる視点が政策に反映される土壤があります。

気候変動、二極化、ポピュリズム――世界はかつてないほど多くの課題に直面しており、都市にもその影響が及んでいます。だからこそ、都市同士が協力し、共に開かれた姿勢を保ち続けることが今、より一層重要なのです。都市、個人、アーティストが手を取り合い、対話と協力を通じて変化を起こしていく必要があります。私は、すべての人に社会を変える力があると信じています。そして、芸術と文化はその変化を導く力を持っているのです。

アムステルダム市は2025年に750周年を迎えます。この記念すべき年に、私たちはWCCFを主催します。約120の都市代表が集まるこのフォーラムは、都市間の連携をより深化させる貴重な機会となるでしょう。私たちは、世界中の都市と学び合い、文化的なネットワークを拡げていきたいと考えています。

東京とアムステルダムの文化交流は、すでに数十年の歴史があります。この関係をさらに強化し、2026年に向けて新たな協力を築いていきたいと考えます。東京はオランダの文化輸出先として常に上位に位置し

ており、今後も互いの文化を通じて人と人とがつながることを期待しています。

最後に申し上げたいのは、文化が都市を形作るということです。アムステルダムは、芸術と文化、そして多様性への寛容さに根ざしています。私たちはこの都市の価値観を世界と共有し、より開かれた未来を築いていきたいと願っています。アートと文化の力を信じ、都市と都市が共に成長できることを心から信じています。